

巻頭言

「新国立競技場と 2020 東京オリンピック・パラリンピック」

理事長 新谷 友良

すったもんだの騒ぎがあった新国立競技場の工事が進んでいます。JR 千駄ヶ谷と信濃町の間で、外装の組みあがった競技場の様子が電車から見えます。完成の暁には「杜のスタジアム」と呼ばれる予定です。

この競技場をバリアフリーなものにするために「ユニバーサルデザインワークショップ」が2年間に亘って8回開催され、4月に終了しました。ワークショップにはさまざまな障害者団体が参加し、私たちには気づきのない多くの意見が出ました。新しい競技場には多くの車いす観戦スペースが設けられていますが、このスペースはどの場所の車いすの人も競技を見ることのできるように一定の段差が準備されます。また、電動車いす用の電源コンセントも設けられます。発達障害の人のためには、気持ちを静めるための「カームダウン室」も準備されることになりました。議論が一番盛り上がったのはトイレです。先ほどの車いすの人の利用できる広さを持ったトイレ、オストメイト利用の方のトイレ、LGBTの方のトイレ、トイレドアの自動開閉時間を20分に設定するか30分に設定するか、といった具合で、トイレのニーズも非常にさまざまでした。

このような多様なニーズを丁寧に取り上げていくと、そのための設備がどんどん増えていくような感じを持ちますが、議論を重ねていくとニーズの重なりあいが見えてきて、必要な設備も一定の範囲に集約されてきました。例えば、車いすの回転できるトイレのスペースは、赤ん坊のおむつを替えるスペースと共用できます。観客席の階段を、杖を使用する人の利用しやすい高さにすると、一般の人も安心して上り下りできる階段になります。

私たち聴覚障害者にとっては、競技場の情報システムが最大の関心事ですが、競技場の1階と2階の一部にヒアリンググループ席が設けられることになりました。また、フィールドのメイン・サブのスクリーン以外に、コンコースに沢山のモニターやデジタルサイネージが準備されますが、そこには「すべての音声情報の文字化」を訴えました。現在情報システムを設計・運営をするための事業者を日本スポーツ振興センター（JSC）が選定中で、この秋に事業者が決まって詳細設計が始まります。私たちにとってのバリアフリー実現の正念場です。